

仏法の要諦は「一人立つ」精神

（御書全集三二八頁十七行目、三二九頁六行目）
編年体御書 九二六頁七行目、同頁十四行目

此の事^{こと}いまだ・ひろまらず一閻浮提^{いゑんぶだい}の内に仏滅後・二千二百二十五年が間一人も唱えず日蓮一人・南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声もをしまず唱うるなり

われわれの三世にわたる根本の師匠は、日蓮大聖人であります。釈尊滅後二千余年のあいだ、どんなに唱えたくとも、だれ一人、口にすることのできなかった南無妙法蓮華經の題目を、日蓮大聖人は、押し寄せるであろう迫害、中傷の嵐^{あらし}を覚悟^{あかし}のうえで、命を賭^かして説いてくださった。われわれは、この深恩を夢にも忘れることがあってはならないと思うのであります。

朝晩の勤行唱題は、われわれにとってごく普通のことのよう^{よう}に生活のリズムとなっておりすが、

じつはこのことが、どれほど甚深じんじんの意義を秘めていることか——。二千年余の長きにわたって、人々が知ると知らざるとにかかわらず、生命の奥底で求めに求めてきた一点こそ、南無妙法蓮華経だったのであります。

生死の問題のように人間の幸、不幸を決める決定的な分岐点ぶんきてんに立ったとき、この世の地位、財産、名誉等は、なんら役に立ちません。御書に「今日本国の高僧等も南無日蓮聖人となえんとすとも南無計りにてやあらんずらんふびんふびん」(御書全集二八七頁)といわれているように、業苦の淵ふちを垣間かきまみた生命は、ひたすら南無妙法蓮華経を求めぬくのであります。

しかも御本尊に縁することのなかった生命は、求めて得られず、なにに「南無」してよいのか、すなわち、なにをよりどころにしてよいのかわからず、苦悩の海で、あてのない航海を続けていかざるをえません。

ゆえに、大聖人は「彼の天台の座主ざすよりも南無妙法蓮華経と唱うる頼人らいにんとはなるべし」(御書全集二六〇頁)とおおせなのであります。「頼人」とは、この世の不幸の象徴でありましょう。「天台の座主」つまり世の中でいかに位人臣くらいじんしんを極めようとも、南無妙法蓮華経と唱えることのできる大福運に比べればいかほどのこともない。したがって自分が、どんな恵まれない境涯にあらうとも、今、現実に題目を唱えることができるということは、確たる仏法の正道なのであります。

その現在の一瞬に、苦楽一如、善惡一如の大生命力を湧現させるためにこそ、大聖人は御本尊をし、たためられたのであります。報恩感謝、これにすぎるものではありません。このことを、朝晩の唱題の

さい、深くかみしめることのできる日々でありたい。

つぎに「日蓮一人」ということについてふれておきたい。

これは「諸法実相抄」に「日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが」うんぬんとあるのと同様、本宗、学会永遠の指針である。「一人立つ精神」「一人が原点」に通ずると拝せましょう。

尽未来際じんみらいさいをうるおす清流が、大聖人御一人に源を発するように、いまや大河のごとく水かさを増しつつある私たちの運動も、もとはといえば、老齡の身を極寒の獄中に殉ぜられた初代会長牧口常三郎先生、その遺志を継いで国破れた山河に一人立たれた二代会長戸田城聖先生の戦いに発しているのです。

広くこれを論ずれば、戦野がいかに多角化、重層化しようとも、その運動がどれだけ進展し価値を生んだかはかる尺度は、それをとおして皆さん方一人ひとりがどれだけ境涯を開き、人間革命の実証を示すことができたかにつきますのであります。その一点をぬきにした運動というものは、どんなにはなばなしかろうと、広宣流布の名に値あたしない空転であるといっても過言ではない。

「声」とは生命感応の響き

さらに重要なことは「声もをしまず唱うるなり」との個所であります。「声仏事を為なす」とおおせられているように、声というものはまことに不思議な力をもっている。

あの人の声を聞くとほんとうに気持ちがいい、さわやかだという人もあれば、声を聞いただけで、うんざりするような気分させられる場合もある。目は心の窓であるように、声こそわが生命の明暗をあやまたずに映しだすスクリーンであります。

ともかく、声には宮殿堂の奥深くより発する、力強い響きがなくてはならない。能破、擬破という言葉があります、たとえば友の誤りを、ときに厳しく指摘してあげなければならぬ場合もある。そのさい、自分の生命に友を思う一念が脈打っていれば、指導は梵音声にも似た力強い慈愛の響きと成って、友の生命に巣くう障魔を打ち破っていくにちがいない。これ能破であります。逆に、いらいらしたり、感情に走ったりした生命状態であれば、同じ言葉を発したとしても、相手の心に入るものではありません。擬破であり、残るものは感情的な対立やしこりだけであります。

竜口の法難のさいの大聖人のお振る舞いは、声の力用をあますところなく示したものと拝せます。権勢におごる平左衛門尉は、郎党数百人をひきつれて、松葉ヶ谷の草庵へ大聖人を捕捉にやってくるのですが、これに対し大聖人は一步も退くことなく、彼らを大音声で叱咤される。

——「日蓮・大高声を放ちて申すあらをもしろや平左衛門尉が・ものにくるうを見よ、とのばら但今日日本の柱をたをすと・よばはりしかば……」（御書全集九一二頁）と。

おびただしい刀や弓をまえにして大聖人が臆するとは思いのほか、このようなすさまじい気迫にふれ、郎党どもの周章狼狽したようすが「種種御振舞御書」には、手にとるように描かれています。

もとより「大音声」「大高声」といっても、たんに声が大きいということだけではない。その人の

内なる生命の明暗が、外なる言語音声、きんせ挙措動作となつて発現してくるさいの「感応の響き」が「大」なのであります。

したがって、ごく小人数の親しい語らいであっても、そこに生命の「感応の響き」さえあれば「大音声」「大高声」であるといつてよい。極端に言えば、たとえ声なき言葉であっても、その振る舞いをおして、同じ効果を發揮する場合さえあるかもしれない。要はどれだけ「一人」の生命の宝塔を開き、じょうじゆ仏事を成就していけるかであります。

だからこそわれわれは、声を惜しんではならないのであります。限られた生涯を、尊い使命に生きるならば、この偉大な仏法を力のかぎり語り継いでいくことこそ、われらの本懐であります。

二十一世紀へ妙法の根を深く広く

例せば風に随したがつて波の大小あり薪たきぎによつて火の高下あり池に随したがつて蓮はちすの大小あり雨の大小は竜による根ふかければ枝しげし源みなもと遠ければ流ながれながしと・いうこれなり

日蓮大聖人が一人立つて妙法を唱えられたことが、いっさいの根源力となつて、広宣流布をしていく原理を具体的な例をあげて、説いてくださっているわけであります。すなわち、風と波、薪と火、

池と蓮、竜と雨、根と枝、源と流れといった関係のうえから、わかりやすく教えておられます。

「根ふかければ枝しげし源遠ければ流ながし」

なにごとも「根源」さえ磐石ばんじやくでありさえすれば、いっさいは栄えていくということでもあります。

「根源」という言葉を分解すれば「根」と「源」になります。万事に根さえしっかりとし、地中の奥深く張ってあれば、大樹に育っていくということでもあります。空をおおうような大木には、それ相応の根の張り方があります。

川の流れについても、その水源がどこに位置するかで、大河になるか小川に終わるかが決まってしまふのは当然です。たとえばナイル川ですが、その地中海にそそぐ河口から、はるか六千六百キロもさかのぼったルワンダに水源を見いだすことができます。

さらに「根ふかければ枝しげし」「源遠ければ流ながし」の両御文を、大聖人は同じ意味で使っておられますが、そこには若干のニュアンスの相違があるようです。「根ふかければ……」がヨコへの広がりや方向性としているのに対し、「源遠ければ……」はタテの流れの永遠性を意味しているといってよい。

この二つの原理は、現代のわれわれにとっても、じつに重要な機軸きじくを示されていると拝せします。

第一に、あらゆる分野、あらゆる次元にわたって、地中深くそして広く、妙法の根を張っていかねければならないということでもあります。これなくして、大聖人の仏法を、人類の共有財産にしていくことはできない。皆さんはどうか、そのための根っこになっていただきたい。

第二に、妙法の流れを永遠たらしむるためには、崇高なる伝統と、そこにたたえられた満々たる草創の息吹を、つねに胸中に通わせていかななくてはならない。組織であれ、国であれ、伝統のないところほどもろいものはありません。時の流れのままにいつしか生命力を枯渇させ、老残の姿をさらしだしてしまふものであります。われわれは、史上数多くみられるそのような事例の轍を踏むようなことがあってはならない。それには、信・行・学の根本軌道を、厳しく継承していくことを第一義とすべきであります。

千里の道も一歩より始まる

周の代の七百年は文王の礼孝による秦の世ほどもなし始皇の左道によるなり

中国の古代国家・周の世が七百年も続き、秦の時代が、始祖の没後ほどなく滅亡の運命をたどったのはなぜか。それは周の文王、秦の始皇帝という、それぞれの建国の祖の振る舞いによることが明らかであるとおおせなのであります。

「十八史略」によれば、秦の始皇帝は、文化を破壊した専制暴君の典型であった。戦国時代、強大な軍事力をもち「虎狼の国」として恐れられていた秦は、他の六か国を占領し、天下統一を成し遂げ

る。秦王は、^{はしや}覇者にふさわしい名称を欲し、中国太古の名君といわれた三皇五帝を超えるものとして、三皇の「皇」と五帝の「帝」を合わせて「皇帝」と称した。しかもそれだけでは足りず、その上に「始」をつけ「始皇帝」とし、天下、人臣の始祖たることを^{せんしやう}僭称したというのであります。新秩序に従おうとしなかった多くの学者を弾圧し、その著書を焼いた「焚書坑儒」事件などは、よく知られております。

これに対し周の時代が長く続いたのは、創業の文王の業績によるところが多いといわれております。文王については、^{さんぼう}名参謀・^{たいこうぼう}太公望との「釣り」にまつわる逸話などでは有名ですが、その治世の実をたたえる話として、つぎのようなエピソードが伝えられている。――周の国に近い二つの国で、あるとき、土地争いが起こった。なかなか決着がつかず、周へ行って裁定を仰ごうとした。ところが一歩、周の領内に入ると農民があぜを譲りあい、年長者を大切にしているのに接し、二人はすっかり恥ずかしくなり、労せずして和解が成りたったというのであります。

もとより「十八史略」は、一つの史観にのっとって書かれたものであり、今日の目から見れば多くの異論もあるはずであります。その問題はさておき、大聖人は当時流布していた故事を例にとり、草創期の伝統というものが、いかに大きな力を発揮するかを述べられているのであります。

ともあれ、昔も今も、またわが国においても、他国においても、さらに大小を問わず、いかなる団体においても「源遠」をいかにして「長流」にしていくかが、最大の課題であることはまちがいない。

この一点において失敗するならば、いかに一時的に華やかであっても、それは一炊の夢のごとく、はたまた、うたかたのごとく儚いものとなってしまふものであります。

仏法の歴史においても、釈尊は十大弟子をつくって法を久住せしめようとした。また、付法蔵二十四人の人々が、つぎつぎと仏法の松明を伝持しながら、時代の昂然たる灯としてきたのであります。さらに、天台大師もまた、その仏法を、なんとか後世へ伝えていくことを念願し、章安、妙楽、そして日本の伝教等は、その精神の後継の人でありました。

日蓮大聖人もまた、末法万年尽未来際にまで流布すべき大法として、大御本尊を建立されたのであります。弟子たちに与えられた数多くのお手紙の行間からは、その未来久住、民衆救済の熱誠があふれでております。かならずやその文字が、後世の人々を触発し、人間仏法の規範、鏡となっていくであらうとの大確信の心情が、心に食い入ってくるのであります。

万代にわたる御本仏の慈悲

日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし、日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ

有名な御文です。私はこの文に接するたびに、日蓮大聖人の民衆にそそがれる大慈大悲を感じ、胸が熱くなってくる。この崇高な叫びを、世の指導者はなんと聞か、と叫ばずにはおられません。

まず、この御文は、主師親の三徳をあらわされた文であります。「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」とは親の徳、「日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり」とは師の徳、「無間地獄の道をふさぎぬ」とは主の徳、と拝される。すなわち、日蓮大聖人が主・師・親の三徳具備の仏であると宣言された御文であります。

第一に、日蓮大聖人は「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」と述べられている。「日蓮が慈悲曠大ならば」が人、「南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」が法をあらわすことはいうまでもありません。

日蓮大聖人は、学問や観念で人々を救われたのではない。慈悲という本源的生命のうえから発する力をもって、人々の救済に向かわれたのであります。

されば「開目抄」には「日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・いだきぬべし」(御書全集二〇二卷)と説かれたのであります。

慈悲なきところに難はない。民衆を本源より救いきろうとする慈悲の力のまえには、これを妨げる三障四魔が紛然として競い起こるのが、仏法の原理であります。日蓮大聖人は「仏法は勝負なり」の道理によって、たびかさなる難を忍ばれ、大慈悲のやむにやまれぬ発露のままに、実践行に挺身され

たのであります。

「南無妙法蓮華經は万年の外・未来までもながるべし」とは、南無妙法蓮華經の法力が、慈悲という大聖人の人格に発する力によって尽未来際にまで流れ通うということであり、しよせん、この文は広宣流布の淵源が、日蓮大聖人の慈悲の振る舞いから始まったことを意味しているといつてよい。

慈悲とは、仏法を根本にした崇高な人間の営為のなかに、にじみでてくる人間の光なのであります。法、法といつても、しよせんは、仏法を信ずる人間の営みのなかに流れていくことはまちがいない。

第二に「日本国の一切衆生の盲目」の「盲目」とは、これは肉眼をいうのではない。どんなによい肉眼をもつていても、生命の本源に暗く、人生に暗く、未来の光を感じない人はここであるという盲目なのであります。

日蓮大聖人の仏法は、たとえば暗闇をさまよう船を導く灯台であります。また、荒海を航行する船の羅針盤であります。方向性を失った生活、人生、社会はみじめこのうえもない。つねに未来を切り開く叡智の光の光源こそ、南無妙法蓮華經であることを、強く訴えておきたい。

また、ここには師弟の問題が論じられている。師弟こそ人間の生き方の究極であり、生命の盲目を開く師なき人は、人間として向上を失つていくのであります。

第三に「無間地獄の道をふさぎぬ」の「無間地獄」とは、人間の苦悩の極限をさすのであり、人間が人間らしさを失い、品位も尊厳も、芥のごとく踏みにじられていく塗炭の苦しみをいうのであります。

す。その最たるものは戦争でありましょう。

ゆえに、無間地獄の道をふさぐということは、あらゆる苦悩の根源である、生命奥底の魔性を冥伏させることによって、三毒熾盛の根を断つことを意味している。そこに、人間がもつとも人間らしく生きるこののできる平和、文化建設の方途が示されることは必然であります。

天台、伝教に超える功德

此の功德は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたり、極樂百年の修行は穢土の一日の功德に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか

「此の功德は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたり」

日蓮大聖人の、主・師・親の三徳を具備なされた三大秘法の仏法を流布しゆく功德は、伝教、天台にも超過し、竜樹、迦葉にも勝れているとおおせであります。

迦葉、竜樹、天台、伝教がいまだ弘めなかった「大法」を弘通する者は、これらの人々の受けなかった「大功德」を受けられるとおおせなのであります。まさに「法妙なるが故に人貴し」の原理であります。それは「人貴きが故に所尊し」となっていくことも必然である。

ここは、あくまでも日蓮大聖人の仏法、および御自身の功德について述べられた御文です。そのことを前提としたうえで、私たち信徒の立場に約して拝するならば、われわれにとってまことにありがたいおおせであります。あの釈尊十大弟子の筆頭たる摩訶迦葉、かの、大乘八宗の祖とされる竜樹を凌駕し、中国において小釈迦といわれた大聖哲・天台大師を超え、かつまた、日本の平安期の精神文化の基礎を築いた伝教大師に勝る、とのおおせである。

ここに、迦葉、竜樹を代表としてインドの先哲、天台大師を代表として中国の碩学、伝教大師を代表として日本の大宗教家をあげておられる。三国を網羅しているということは、当時の世界観に照らして全世界に通ずる意味をもっているのです。すなわち、大御本尊を受持し、日蓮大聖人の仏法を信ずる人は、全世界の先哲や碩学よりもなお尊貴であることを訴えておられるのであります。

末法の大法・南無妙法蓮華經こそ宇宙本源のリズムの根源力であり、この妙法を唱えられる福運を、われわれは改めて肝に銘ずべきでありましょう。

またこれこそ、日蓮大聖人の仏法の骨髓の御教示であることが出来る。なぜなら、天台、伝教等々これらの先哲は、かつて人々の崇拜の的であり、雲閣月卿をみるがごとき高貴な存在であった。それに対し、われらは無名の庶民である。しかし、それらの人々よりも、なお偉大な人間としての実践行動ができることを示されているからであります。

「極楽百年の修行は穢土の一日の功德に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか」——と。

「極楽百年の修行」とは、苦難のない、恵まれた環境での修行であるともいえる。これに対し「穢土」

とは、苦難重疊じゅうようのなかでの人間革命の日々であります。安楽イスのなかにあるような生き方に、どうしてわが生命の電撃的な変革が可能となるでありましょうか。

汗と労苦のなかにのみ、人間の真実の価値は生ずるのであり、日蓮大聖人の仏法は、この現実との鋭い対決のなかに、その偉大なる昇華しょうかがあることを説き示されたのであります。

「正像二千年の弘通……」について、これはまず第一に、日蓮大聖人の仏法が、釈尊の仏法よりいかに偉大であるかを、時に約して説法されたものであります。

時になつた実践行動を

是れひとへに日蓮が智のかしこきには・あらず時のしからしむる耳のみみ

仏法流布における「時」の重要性を、鋭く明言された一節です。

当時、末法といえど、正像二千年が終わり、その延長として、暗いイメージをともなっていました。それに対し、日蓮大聖人は、末法という時代が、いかに光輝こうきにつつまれた時であるかを確信せられていきます。

さらに私は、この一句に万感を込めて、広宣流布の時を感ぜられている大聖人の御心境が胸に迫っ

てくるのであります。夕日のごとく地に落ちていく既成の釈尊の仏法——それに対し、旭日のごとく昇りゆく胸中の灼熱しやくねつのエネルギーをもった大仏法、その対照はあまりにも鮮やかであったにちがいないりません。

この一節から、大聖人は、一人の人間の偉大な智力よりも、時にかなった実践行動を展開する有智の民衆の力こそが偉大であることを教えられていると、私は拝するのであります。

つぎの文に「春は花さき秋は菓このみなる夏は・あたたかに冬は・つめたし時のしからしむるに有らずや」とお述べのように、仏法三千年の弘通を貫く主軸は「時」であったことを、天地自然の道理をあげて説かれています。

「撰時抄」の冒頭の有名な一句は「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」(御書全集二五六)との御文であります。

「必ず先づ」とある。教、機、時、国、教法流布きようほうりゅうふの先後せんご、という宗教の五綱ごこうの中核をなすものは「時」であり、ここにすべてが包摂ほうせつされるといってよい。たとえば、機といっても民衆の鼓動はたえず時代精神を反映したものであり、時のなかにすべて含まれるのです。

だが「時のしからしむる耳のみみ」とおおせを、ただ漫然まんぜんと時を過ごしていれば、いつかは自然と広布の時がくるというように、受動的に固着化してとらえるのは、明らかに誤りであります。それは、身近な例でいえば、電気ガマのスイッチも入れず、時がくればご飯が炊たけるであろうと、はかなく夢想しているようなものと変わりはない。ゆえにこの御文は、御本仏日蓮大聖人につらなり、地涌の門下

としての能動の誓いを込めて受け取らなければならない御金言と受けとめたいのであります。

時代を動かすものは、主義にあらず人間である——といった先人がいます。われわれもまた、一人の人間革命が日本の運命、世の宿命をも変えていくことを確信している。

日寛上人の撰時抄文段には「時を知るを以ての故に大法師と名づく」と云云。文意に云く、時尅相応の道を知るを以ての故に大法師と名づくと云云。大法師とは能く法を説いて衆生を利する故なり」とあります。

時を知り、時尅相応の道を選びつつ、衆生を利する大法師の出現があつて、初めて広宣流布への確実な歩みが開始されることを忘れてはならない。末法の初め、時代と民衆が無明の深き眠りについていたころ、御本仏日蓮大聖人は末法弘通の大法を建立された。その法性の慧火は七百年余の歳月を経て、いま仏法の旭日となり、地平を昇りはじめています。

総じて、時を知る——とは、人々が何を欲しているか、人情の機微を知ること、人心の帰趨を知ることとも含まれる。いかなる激浪をも乗り越え、機雷を回避しつつ、現実の舞台のなかでカジを取り、眼光鋭く本源を見ぬいて適切に処置をとる人でなければなりません。

ゆえにそれは、民衆救済という大責任に立ったときに、とりうる行動といえますし、そのときにこそ初めて、民衆の有智の団結の輪はつくられゆくのであります。

かつて、戸田先生は、広布を担いゆく丈夫に「いまはいかなる時かを凝視して」と呼びかけております。

いま皆さんの敢闘^{かんとう}によって、学会は、いよいよ時を得て、民衆の文化と平和へ貢献しゆく道を、着実に歩んでおります。どうか今後とも、広宣流布のために、立派な指導者に育たれるようお願い申し上げます。